

はじめに

いま、全国の小・中学生のうちおよそ二パーセント、約二〇万人が不登校の状態にあるといわれています。中学生に限ると七〜八人に一人が不登校または不登校傾向にあるとも推計されています。

勉強はもちろん、部活での目標達成、行事での企画運営など、社会生活を営んでいくうえで必要なことを子どもに伝える機能のほとんどを、学校に依存している社会です。しかも学歴主義が根強い。

そんな社会で、子どもが学校に行っていないとなると、親は大きな不安に襲われます。

しかも、親世代くらいまでは、学校は必ず行くものという刷り込みを強烈にされています。したがって、わが子が学校に行かないということに、ほとんど本能的な拒否反応を示してしまいがちです。

不登校をテーマにした本は、たくさんあります。多くは、わが子の不登校に強い不安を感じている親の心に寄り添ってくれるような本です。当事者による体験談も人気です。不登校が起こる原因や構造を学術的に解明しようとする本もあります。

でもこの本は、いずれでもありません。

多くの親がイメージする一般的な「学校」に行かなくても、学べる場所がこれだけある、と紹介する本です。

そうすることで、「学校」に行かなくてもいきなり詰んだりほししないと伝えたい。むしろ学校なんて選択肢の一つでしかないと思んなが思える社会にしていきたい。つまり社会として、学校に依存しすぎるのをやめましょうという提案です。

子どもの人生における学校の比重を減らせれば、子どもたちが学校で感じるストレスは減るはず。そうすれば、不登校はもちろん、いじめだって減るはず。

第一章では、データを多用しながら、不登校をめぐる社会の動きを確認します。

第二章では、比較的気軽に、スポット的に利用できる学びの場を紹介します。ホームスクーリングをしている方々の話からは、家でもできるオンライン教材などの具体名も出て

きました。

第三章では、学校に籍を置きながら利用できる、学校の出先機関のような施設やサービスを紹介します。

第四章では、不登校経験者に特化して受け入れる学校を紹介します。学校と傍点を打つたのは、文部科学省が認める正式な学校ではない学校も含まれているからです。

第五章では、いまだきの通信制高校事情を紹介します。「通信制」とはいつても、自分の好きな日数だけ無理せずに通えるフレキシブルな学校としての通信制高校が増えているのです。

第六章では、今回の現場取材を通して見えてきた不登校「支援」の課題、学校制度の問題点を、これまでのさまざまな教育現場での取材経験と重ね合わせながら、私なりの視点でひもときます。

でもこの本は、ガイドブックではありません。どういう性格の場所が、実際にはどんな雰囲気で、どんな心意気をもったひとたちによって運営されているのかをできるだけ丁寧に描こうと思っています。

彼らの心意気自体が、わが子の不登校に不安を感じている親にとっての、いたわりとねぎらいと励ましになるのではないかと思います。

目次

序 章 学校に行きたくないと言えたとき

エピソード1 学校に行くのをからだ拒否する 〈マユミ〉

エピソード2 理由はわからない。グレーゾーンなのかな? 〈ユタカ〉

エピソード3 必要なのは、医療じゃなくて、ギフト教育 〈タクマ〉

第一章 不登校と社会の変化

七〇八人に一人は不登校・不登校傾向

きっかけは自分でもよくわからない

引きずってまで学校に連れて行く義務はない

リアルがダメならオンラインで対処する

必ずしも学校復帰をゴールとはしない構え

第二章

居場所・塾・ホームスクール

目指すのは学び環境のコーディネーション
明快さを求める姿勢こそが不登校を生む!?
しみじみとした地味な幸せへの感受性

平日昼間に森に集まる子どもたち——いもいも 森の教室
学校はちゃんとしちゃいけない!?

悩める一〇代の心理的ストッパーを外す——ビーンズ

子どもを縛る邪魔な価値観すら否定しない

なんだかんだで毎日楽しく生きていければいい

青春経験が子どもたちを飛躍させる

協力が自然に集まるあたたかい雰囲気

「挑戦期」に入るまで 正論は禁物

不登校支援をうたう塾は玉石混濁

「雑な話」で子どもたちを勇気づけよう

家庭を拠点とした学びの実践者たち

——ホームスクール&ホームエデュケーション家族会

やらせている感が強いと親にも負担が大きい

得意分野がわかりにくい子どもの支援は難しい

ホームスクールにもさまざまなスタイルがある——日本ホームスクール支援協会

第三章 学校から半歩離れる教育支援

仮想空間に現れた未来の「学校」!?——カタリバ room K

不登校というテーマに行き着いたのは必然

約四割の自治体が教育支援センターを設置していない

公設民営フリースクールの落とし穴——トイボックス スマイルファクトリー

「校内フリースクール」という選択——広島県 スペシャルサポートルーム

オンラインでクラブや文化祭や修学旅行も

第四章

不登校経験者が集う学校

私学の元校長が結集した修学支援センター——神奈川私学修学支援センター
一度引き受けた生徒は最後まで面倒を見る

不登校支援約五〇年の歴史を活かしたフリースクール——星槎ジュニアスクール
フリースクールの質の担保が今後の課題

不登校特例校が「学校」の「フツー」を揺さぶる——星槎中学高等学校

不屈の精神がつくった山間の全寮制不登校特例校——西濃学園中学校・高等学校

中学校に続いて高校も不登校特例校に

自分でメシが食えるようになることが目標

公立中学校でも大胆にカリキュラムを弾力化——岐阜市立草潤中学校

全国から不登校経験者が集まる全日制普通科高校——北星学園余市高等学校

やんちゃグループとおとなしいグループが激突

教科の知識がなくて生きていけない子はいない

第五章 フレキシブルに通える通信制高校

通える通信制高校が二〇〇〇年代からメジャーに——星槎国際高等学校

多彩なゼミメニューから時間割をカスタムメイドする

高校であることを忘れない通信制高校——目黒日本大学高等学校通信制課程
優秀な教員の確保が通信制高校の今後の課題

第六章 モザイク模様の学び環境へ

なぜ子どもたちは友達関係を怖がるのか

「支援」という言葉がもつ危険性

学校は学ぶ手段の選択肢の一つでしかない

これからはみんなで手分けして学ぶ時代

オルタナティブスクールは一条校になれるか

不登校特例校が増えれば入試制度が変わる!?

子どもの潜在能力を引き出す自己決定の原則

教師の最善の能力は自由の中でのみ栄える
格差社会からわが子を守るために親としてできること
学校を心地よい学びの場にするためのたった一つの提案

終章 親子で取り戻すそれぞれの自分

- エピソード3 (続き) ギフテッド教育を母親がカスタムメイド 〈タクマ〉
エピソード2 (続き) サッカーで進学。そのために勉強も頑張る 〈ユタカ〉
エピソード1 (続き) 中学受験で環境を変え、一生の友人と出会う 〈マユミ〉

おわりに

引用および参考文献

425

422

407

序章

学校に行きたくないと言えたとき

エピソード1 学校に行くのをからだ拒否する 〈マユミ〉

「おなかが痛いから、学校を休みたい」

その日、マユミ（仮名）は学校を休んだ。そして次の日も、

「おなかが痛い」

幼いころからともとおなかを下しやすい。さほど気にしていなかった。だがまた翌日も、

「おなかが痛い」

家では平気そうにしている。そんなことが一週間は続いただろうか。明子（仮名）はいよいよ仮病を疑った。

「やっぱり、おなかが痛い」

「そんなに毎日おなかが痛いなんておかしいでしょ！ 家では平気そうにしてるじゃない

い！ 学校に行きなさい！」

「イヤだ！」

「行きなさい！」

「イヤだ！」

何が何でも学校には行くものだという信念が、ばかばかしいくらい当たり前のこととして、地方都市の比較的厳格な家で生まれ育った明子の骨の髄まで染み込んでいた。

ランドセルを背負わせ、むりやり家から出そうとすると、マユミはドアにしがみついて抵抗した。ここで甘やかしちゃいけない。ビンタを一発かました。それでも、マユミは泣きながら抵抗した。

毎朝が戦争だった。罵声飛び交う。小五の娘を一人残し、明子はくさくさした心持ちで職場へ向かうしかなかった。一方、夫は、娘の登校拒否については、さほど気にしていないように見えた。

学校を休んでいるあいだも、週末も、マユミはずっと家にいた。明子に対しては常に反抗的な態度をとった。それは、日に日にエスカレートしていった。ふたりがいっしょにい

ると、家の中は文字通りの修羅場と化した。ドアにも壁にもたくさん穴が開いた。マユミが開けたものも、明子が開けたものもある。

具体的には覚えていないが、何かの拍子に明子はマユミに嫌みを言った。このとき明子に投げ返されたのは罵声ではなく、ダイニングの椅子だった。

「このやるー。何、投げてんだよー！」

咄嗟とつぎに言い放ったその先で身構えるマユミの、そのときの殺気立った目はいまでも忘れられない。まさしく般若はんじゃの面だった。

しかしその瞬間、何かが変わった。刺すようなそのまなざしが、母である自分にだけ向けられているわけではないことを悟った。怒りに満ちたその目の奥に、自分自身に対する苛立いらだち、焦り、悲しみを感じとった。

「この子は学校に行きたくないんじゃない。からだ拒否してるんだ」

ようやくわかった。行き渋りを始めた五月からすでにふた月以上、自分は毎日、ぱっくりと開いて手当を欲していた娘の傷に、塩を塗り込んでいた。この子のためだと思って。

小言を言う代わりに、娘の横顔をよく見るようになった。

学校に行く代わりに、マユミはジャニーズのおっかけに没頭。「anan」の松本潤の特集を切り抜き、大事そうにファイルしているときの横顔は、椅子を投げたときとはまったくの別人で、生き生きしていて、素敵だった。

「こんなに素敵でいられるなら、学校なんて、無理して行く必要はないのかも……」
初めてそう思えた。

家にいるあいだ、勉強はいつさいしない。最初のうちはお友達が宿題をもってきてくれたが、そのうちそれもなくなった。担任からの連絡も、頻度が減っていった。プレッシャーをかけないように、配慮してくれたのだろう。

しかし、校長との面談では、幻滅した。

校長室には、副校長、学年主任、担任の四人がいた。校長は、教育委員会に不登校児童の報告をしなければいけないと、そのことばかりを口にした。自分の学校に不登校児がいる、そのことを教育委員会に報告し続けなければいけないことを自分の不名誉だととらえているように聞こえた。その責任が自分たち夫婦にあると言いたげだった。娘の様子を気にかけるよりも、自分の立場を気にしていることが伝わってきた。

〈そんなことを聞かされるために、平日の昼間に夫婦そろって時間を調整しなければならなかったのか〉

先に堪忍袋の緒が切れたのは夫だった。怒りをあらわにして席を立ってしまった。

〈一人だけ先に立つなよ……〉

置いていかれたことにムツとしつつ、その場を取りつころう。義務教育のしくみがわかっていなかった。進級できるのか？ 退学とかあるのか？ そんな不安がよぎり、なんとか嫌われないように振る舞った。

あとから思えば、最初から嫌われていたのかもしれない。タワマンが建ち並ぶベイエリアにある公立小学校。高層階から世間を見下ろすいけないパワーカップルが、子どもの教育をないがしろにしたまま、自己実現に明け暮れていると思われていたのかもしれない。

小五の後半から、家族三人で前思春期外来に通院した。学校のカウンセラーの先生からの紹介だった。それには効果を感じた。親子関係を客観視できるようになってきたのだ。「できればマユミさんが将来したいことと結びつけた対話をしてみてください」とアドバ

イスされた。

明子は会社では部下を何人も抱えている。人事採用面談もお手のもの。そういう対話ならプロの自信がある。先生も明子の特性をわかってアドバイスをくれたのかもしれない。

「マユミは将来やってみたいこととかあるの？」

「うーん、グラビア誌の編集者になりたい」

「それなら、ママにも知り合いがたくさんいるから、話聞いてみる？」

「うん！」

いがみ合ってばかりだった母子関係が、少しずつ修復されていった。

「編集者になりたいんだったら、いろんなことを話せるようになっておいたほうがいいね」

部下のモチベーションを刺激するのと同じように、学校に行っているいろんなことを学んでおいたほうがいいと、遠回しに伝えた。マユミも素直に応じていた。

するとあるとき、「小学校がクソなんだ」と言い出した。

実は、小一のころからいじめにあっていた。ものを隠されたり、机に消しゴムのかすを

大量に置かれたり。明子もそれは知っていた。学校に乗り込んで、担任に対応を迫ったことがあった。

マユミが当手を振り返る。

「あのとき、『終わった』って思ったんだよね」

「終わった？」

「ママが先生にチクったりするから、私はますます嫌われた。表だった嫌がらせはされなくなっただけ、誰からも相手にされなくなっただけ」

そこからマユミは「本音を言うと嫌われる」と学び、自分を表現しなくなった。気づけば自分の居場所がなくなっていた。

「ごめん、ずっと気づかなかった。マユミは、捨て猫みたいだったんだね」

いままでのことすべてが明子の腑ふに落ちた。

エピソード2 理由はわからない。グレーゾーンなのかな？ 〈ユタカ〉

街の中心部には高層ビルが建ち並び、行き交う人々は肌の色も目の色も髪の色もそれぞれに違う。街を少し離れれば辺りは密林。世界中の船舶が、二つの巨大な大陸を結ぶくびれの部分を貫通させた水路を行き来する。

商社に勤める泰行（仮名）は、約一年半をすごした勤務地のパナマをあとにした。豊かな駐在生活だった。パナマでは、長男のユタカ（仮名）はインターナショナルスクールの幼稚園に通っていた。帰国後はもともと通っていた幼稚園に戻った。昔のお友達の輪に、すぐに溶け込んだ。春からは小学生だ。

三月一日、東日本大震災。神奈川県にいたので、直接の被害は大きくない。それでも連日の報道を見て、ユタカは怯^{おび}えていた。

「また地震が来たらどうするの？ 津波が来たらどうしよう！」

ぶつくさ言って不安がることしがしばらく続いた。繊細な子なんだなど、親の目からもわ

かった。

小学校に入学して間もなく、集団登校を嫌がるようになった。学校に行けなかったわけではなかったもので、時間をずらして親と登校した。家の窓から集団登校の様子を見下ろして、みんながいなくなったのを確認してから家を出た。

その後ほどなく教室に行くことも嫌がるようになったので、いわゆる「保健室登校」の形に。夏休みが明けても状況は変わらなかった。むしろときどき学校に行くこと自体を渋るようにもなった。

「せめて保健室には行こう」

励ますような口調で伝えると、なんとか応じてくれる。職場の上司も状況を理解して、毎日遅めの出社を認めてくれていた。

折に触れてつい質問してしまう。

「どうして学校に行きたくないの？ 誰か嫌なひとでもいるの？ おなかでも痛いのか？ おなか痛いんだったら病院に行かなきゃいけないよ」

それに対してユタカは、

「なんとなくイヤだ」

と答えるのみ。

幼い子であっても、親の質問に込められた要求や期待は敏感に感じとる。どんなに優しい声色で「どうして学校に行きたくないの？」と聞いたとしても、それは親の「学校に行つてほしい」という願望の表出でしかなく、子どもにとってはストレス以外の何物でもなかったはずだ。

仮に複雑な思いがあつたとしても、小学一年生がそれを言語化できるはずもない。それはわかつていのに、似たような質問をくり返してしまう。答えに窮して顔をしかめるわが子を見て、「何やつてんだ、俺」と我に返る。そのくり返しだった。

自分の中にある「うちの子が、なぜ？」が抑えられない。原因がわからないあいまいさが耐えがたい。妻は比較のおおらかな性格だが、自分の子育てが悪かつたんじゃないかと不安がつていた。

へいじめにあっているのだろうか

本人に聞いてみても、担任と話をしても、そんな様子は感じられない。

保健室の先生はほがらかで、とても良くしてくれている。保健室にはほかにも教室に入れない子が、いつも二、三人いた。そこでお話をしたり、ときどき勉強をしたりしてすごす。

特別支援学級の先生も、ユタカのことをいつも気にかけてくれた。担任の先生も時折自宅まで様子を見に来てくれたが、一方で、プレッシャーを与えないように配慮してくれていることが伝わってきた。

おおらかに見守ってくれていた学校の対応には感謝するばかりだ。

〈発達障害かもしれない〉

そう思ってから発達障害に関する書籍やネットの記事を読み漁った。初めてのところに行くとき「ああしたらどうしよう、こうなったらどうしよう」と不安がるそぶりをよく見せる、何事にも几帳面きつとめんできつちりかつちりやらないと気がすまないなど、たしかに多くのことがユタカに当てはまる。

でも病院に行こうとまでは思わなかった。はっきりと原因を特定してもらいたい気持ちと、障害というレッテルを貼られたくない気持ちとが、常に葛藤していて、ふんぎりがつ

かなかった。

本当に必要なら、保健室の先生や特別支援学級の先生から通院を勧められるだろうし、そう言われないということは、そこまでのことではないのだろうと思えていた。

（いわゆるグレーゾーンなのかな？）

ときどき教室に行くと、固まって、何も喋れ^{しゃべ}なくなってしまうらしい。でも、学校から帰ってくると、近所の友達の遊びに加わって、楽しそうにしている。小学校入学とほぼ同時に始めたサッカースクールにも問題なく通えていた。

小学二年生になった。

ある日、帰宅すると、ユタカが、

「サッカー少年団に入りたい」

と言いだした。

「サッカーならもうやってるじゃないか」

聞けばこういうことだった。

放課後に友達と公園で遊んでいたら、地元のサッカー少年団に所属している友達のお母

さんが、

「ユタカくんも来たら？」

と、誘ってくれたというのだ。

次の週末、少年団が活動するグラウンドに行ってみると、その日はちょうど練習試合だった。なんと、その場で試合に出してもらえた。

同年代の子どもたちに交じってボールを追いかける息子の姿を、ちょっと離れたところから眺めた。もう何カ月も床屋にも行っていなかったから、髪はボサボサの石川五右衛門だ。でも、髪を振り乱して疾走する息子の姿は、生き生きしている。いや、まぶしいくらいに輝いている。

〈この子は、これでいいじゃん〉

あふれ出した涙とともに、自分から憑もつき物が落ちていくのを感じた。あいつにとつての幸せて、こういうものなんだろうな、だったら会社を辞めて、どこか住みやすいところに引っ越してもいいや、と本気で思った。

思い出されたのはパナマの人々の暮らしぶりや、泰行自身が幼少期を過ごしたメキシコ

での暮らしだ。彼らは決して裕福ではなかったが、心にどこかゆとりがあった。いい加減なところも多いが、すべてが決められたとおりに、効率的に、時間通りに動く日本の社会に暮らすひとたちよりも、よほど人生を謳歌おうかしているように見えた。

泰行は、それから起きた自分自身の変化にも気づいた。それまで自分の中にあったださまざまな価値観が溶けて流れていくのを感じた。教室に行けなかうと、世間からどう見られようと、お前はいまのままでもいいと、本気で思えるようになった。気づけば、自分の仕事や人生に対する不安まで、薄れてほとんどなくなっていた。

ユタカに対する態度も、明らかに変わった。あれこれ質問したり、教室に行けるように誘導する下心もなくなった。すると、ユタカの表情も、日に日に変わっていった。

余計な価値観なんて捨てようと思っていた。でも、ひとの価値観なんて意識的に捨てられるものじゃない。意識のうえで捨てようと思っているうちは、無意識に残ってしまった。むしろ、いつか何かのきっかけが向こうからやってきて、それが自分のからだを通り過ぎたとき、気づいたら消えてなくなっているものなのかもしれない。

思い込みを捨てて子どものありのままを認めましょうと言われたって、頭で理解してで

きることじゃない。理屈を超えた体験が必要なのだ。なんとか解決しようと思って肩に力が入っているうちは、そのときはなかなかやってこないし、やってきても気づけないのかもしれない。

相変わらず教室には行けないが、保健室には通っていた。放課後は、友達と遊んでいた。週末のサッカーも欠かさず参加した。つまり、全国の小学生が学校の教室で黒板に向いてお行儀良く座っている時間以外は、ほかの小学生たちと何も変わらなかった。

エピソード3 必要なのは、医療じゃなくて、ギフト教育（タクマ）

不穏な言動が目立ちだしたのはタクマ（仮名）が小学二年生のころだった。

電車に乗ると、急に落ち着きがなくなって、「ゲームをさせろ」と怒りだし、智子（仮名）を蹴る。お出かけをしようと誘っても、自分が楽しめる場所かどうか不安だから行きたくないと言う。急に予定を変更すると癇癪かんしゃくを起こす。出かけた先でパニックになって

大暴れすることも頻繁だった。

着る服を選ぶのにもえらく時間がかかる。着たい服がないと、ぎゅっと小さく体育座りをしたまま、顔を伏せ、固まって動かなくなってしまう。髪を切ると、自分の見た目の変化を過剰に気にして、翌日は学校に行こうとしない。挙句の果てには「重かったから」と、通学路の途中にランドセルを置いてきてしまう……。

知的好奇心は強くて、興味をもったことは自分からどんどん学ぶのに、学校の宿題やドリルが大嫌い。なんとか取り組ませようとすると、耳を塞ぐような姿勢をして何時間でも固まる。そもそも文字や作図が苦手。線をまっすぐ描くのも苦手。

父親はその点に厳しかった。中学受験をして、いい大学に入って、いい会社に就職した。しかも体育会系だった。タクマが宿題をやらずに固まっていたり、習い事に行くのをぐずったりすると、怠けだと解釈した。

タクマの特性と父親の信念がたびたび衝突した。それが本格化したのも小学二年生くらいからだった。肩に担いでむりやり習い事に連れて行ったり、学校に行き渋るタクマを

「この意気地なしがあー！」と恫喝どっかつしたりした。

タクマの体はいつも緊張でガチガチになった。かと思うと、時折暴発して、智子に対してハサミやガラスのピンを投げつけた。身の危険を感じると、智子は二歳下の次男を連れて家を飛び出すこともたびたびだった。

〈この子、殺人事件を起こしちゃうんじゃないか……〉

親子共々、何度も大声を出した、何度も泣きわめいた。上の階の住民が、「大丈夫ですか？」って見に来てくれたこともある。でもそのときは智子も正気ではない。いまは近寄らないと言わんばかりの形相で追い返した。

「死にたい！ このまま殺してくれよ！」

タクマは頻繁に叫んだ。

子どもが死にたいくらいにしんどい思いをしている。それを思うだけで涙があふれて止まらなくなる。でもこのころいちばんつらかったのは、夫が、タクマのしんどさも、智子のつらさも理解できなかったことだった。智子も夫の「マッチョ思考」をなじった。夫とは何度も大喧嘩おおげんかした。

家族のそれぞれが、極限状態まで追いつめられていた。家庭が修羅場だった。

発達障害を扱っている病院で、一通りの生育歴を説明したあと、本人の面談をすると、ものの三分で診断が下った。

「自閉スペクトラム症（ASD）です。ADHD（注意欠如多動性障害）もちよつと入つてますね。〃典型的〃です」

薬を処方された。予想はしていた。

（お母さんが、絶対なんとかしてみせる）

診断を受けてから、智子の中で、何かが覚醒した。これまでの自分の人生で、こんなにやる気になったことはない。割と要領よく、平々凡々と生きてきた。でも、子育てを通して、生まれて初めて自分のミッションが降りてきた気がした。

発達障害について猛勉強を始めた。ファクトを押さえなきゃと思って、知能検査も受けた。発達の凸凹が数値化された。

頑固だったりコミュニケーションが苦手だったりするのはASDの特性として理解できる。多動・衝動性や不注意な部分はADHDで説明できる。過度な繊細さや敏感さは最近聞かれるようになったHSP（ハイリー・センシティブ・パーソン）というカテゴリーにあ

てはまるのかもしれない。ドリルなど特定の学習が苦手なのは学習障害の一種ととらえられる。

こう言っては語弊があるかもしれないが、そのときの智子には、謎を一つ一つ解明していく楽しさがあった。目が爛々と輝き、生き生きとした活力に満たされているのを感じた。智子がタクマのありのままを本気で理解するようになってから、タクマも智子を深く信頼するようになった。

普段の生活で重要なのは「暇対策」だと見立てた。たとえば、電車に乗っているあいだの退屈を人一倍ストレスに感じてしまうのがタクマの特性。だとしたらそのあいだゲームをやっているのはしかたない。長時間ゲームをするなんて良くないという教育上の考え方があるのはわかるが、それよりも、本人が苦しくないことを優先した。移動が平和になった。

同じ短パンとTシャツを何枚も買うことで、朝、服を選ぶのに時間がかからなくなった。その代わり、冬でも毎日短パン・Tシャツだ。美容院にもタクマのこだわりの髪型を細かく伝えた。その通りに切ってもらえれば、何もトラブルは起こらなくなった。予定変更が

あるときもちょっと前もって予告しておけば、パニックにはならないとわかった。

生活上関わるひとたちには、みんなにタクマの特性を説明した。みんなが理解してくれば、トラブルはなくさせることがわかった。それで、薬の服用も通院もやめた。

問題は、学校をどうするか、だった。授業は聞かない、宿題もやらない。この点に関しては、学校の先生からもさじを投げられていた。

四年生になると、学校との関係が極端に悪化した。

責任感の強い、ベテランの担任だった。

タクマがあんまり迷惑をかけるので、フリースクールなどを検討しようかと相談したら、「まだ学校でやっていけるわよ。学校に来られなくなったら、社会でやっていけなくなるわよ」と言われた。発達に凸凹のある子どもたちへの対応にも慣れていられるらしい。

とにかく熱心だった。仕事から帰ると、頻繁に、担任からの留守電が残っていた。「今日タクマくんはこんなことをしました。お母さん、タクマくんがどうしたら学級活動に参加できるか、ちゃんと考えてくれますか?」。

そんなことを言われても、学校での様子を知らなきゃ具体的な対策ができない。そこで

智子は、自分も学校に通って、息子をただひたすら観察することにした。

わが子がどんな問題行動を起こしても、いつさい口出しせず、ただ観察して、その様子を写真に撮り、ノートパソコンに記録することに決めた。担任にも事前には伝えた。

「まずは分析させてください。態度を正す目的で来ていないので私は口出ししません。ご理解ください」

子どもたちからしてみれば、「毎日パソコンを持ってタクマの近くにいるおばさん、誰？」みたいな。実際、智子は、母親であることを脇に置き、客観的な観察者になりきった。

タクマも近くに母親がいることをほぼ気にせず、普段通りに振る舞った。

学校で智子が見たのは、ためらいなく、全身で退屈を表現する息子の姿だった。授業がつまらないと、大あくびをする、立ち歩く、「授業がつまらないです」と先生に直言する。しまいには、友達をそそのかして、教室を出てしまう。「校長先生の話はずまらない」と言って、朝礼の時間にはひとりで堂々と教室に残り、漫画を読む。

このような状況のわが子に、影のように張り付いて、何も口出ししないなんて、並大抵

の精神状態でできることではない。記録のためだと割り切って、その様子を興味深く観察する視点に立たないと無理だった。逆に、そんな視点に立たないとやってられないほどに、タクマを育てていくのは難しかったのだ。

それを週に二三日、かれこれ二カ月も続けたが、解決策は見つからない。

とうとう学校から通院を促された。薬の服用も相談してほしいと。

しかたなく、病院に行つた。すると思ひもよらぬことを聞かされた。

「たぶん、ギフトッド（突出した才能をもつひと）だと思ひます。医療じゃなくて、ギフトッド教育を受けさせたほうがいい。お薬も不要です。ギフトッドを扱う病院を紹介しま
す」

〈まさか！〉

思い返せば、幼少期からちよつと変わっていた。ひと言でいえば、知的な部分では異様に早熟だった。

児童館に連れて行つてもまっさきに本棚の前に進んで、渋い顔をしてじーっと本を読んでいた。三歳になると、興味が自然科学の分野に向いた。あらゆる図鑑を読み漁つた。さ

ながら小さな博士のようだった。

〈やばい。うちの子、天才だ〉

まわりの大人も、

「え、どう育てたら、そんなに本を読むようになるの？」

と、驚いてくれた。

幼稚園の年長さんくらいになると、歴史に興味をもち始めた。あつという間に日本の歴史はほぼ頭に入ってしまった。日本刀や元素にも興味をもった。あらゆるジャンルの知識を、次から次へと吸収していった。

医師の見解を受けて、智子はギフトテッドに関する書籍に片っ端から手を伸ばした。紹介された病院に行くところには、ギフトテッドについてのちよつとした専門家になっていた。パズルのピースがバーツとはまっていくように、すべてのことが符合した。

一般的にはIQ（知能指数）が70未満だと「知的障害」とされて支援の対象になる。ところがIQが130だと、支援の対象にはならない。余裕があるなら問題ないという考え方に基づいている。しかし、過ぎたるは及ばざるがごとし。IQ130の子どもは、IQ

70の子どもと同じ次元の困難さを学校教育の中で感じているはずであることがわかった。

また、WISCと呼ばれる知能検査によれば、タクマは言語能力が異常に高い半面、手先の作業が苦手な傾向がわかった。その落差があまりに大きいので、本を読んだり動画を見たりして学ぶことは得意でも、漢字の書き取りやドリル学習には強いストレスを感じてしまうのだとわかった。

改めて学校での学習活動とタクマの特性を照らし合わせてみると、学校での学習活動のほとんどが、タクマにとっては不快でしかないことがはっきりした。やり方さえ違えば、タクマにとって学びは快であることもわかっていった。

つまるところ、学校にいることは、タクマにとっては学びの邪魔でしかない。

学校との面談で、校長から「タクマくんがギフトッドだとしても、学校としてできることには限界があります。ご家庭でやれたら、そうしたほうがいいかもしれない」と言ってもらえた。教室を覗くと、タクマの目は完全に死んでいた。

それを見て、決心がついた。

「先生、さようなら。帰ります。ちょっと、もう、限界です。不登校です。学校には行か

せないで、家でしばらく様子を見たいと思います」

家に帰ってタクマに話した。

「もうやめようか、学校」

そのときタクマからこぼれたひと言が忘れられない。

「はあ、息ができる」

親子の気持ちが固まった。

〈もう学校には行かない〉